

『資本論』における時間と空間

高 須 賀 義 博

マルクス経済学で「死んだものと生きているもの」を選別した場合、商品のフェティシズムから始まり経済的「三位一体」範式批判に至る彼の物象化論を後者に属するとする点では多分異論はないであろう。これは、資本主義の特殊性を明確にするマルクスの立論の基軸をなすものであり、彼自身が『資本論』を貫く赤い糸として述べているところである¹⁾。マルクスは経済的「三位一体」範式は「資本制的生産のなかにとらわれている生産当事者たちの観念と意識の中に生きている」(Th. p. 481)「日常生活の宗教」(Kap. III. p. 1063)であるとして、それが成立する世界を「魔法にかけられ逆倒させられた世界」(Kap. III. p. 1059)であると断定した。マルクスによれば、資本主義経済を支える意識や観念およびそれを合理化する経済学のすべてが虚偽意識に他ならない。これは資本主義を転倒した社会構成体と見る視角であって、この点が論証されれば、資本主義の歴史的限界は明確になることは確かである。だが、資本主義の転倒性を判定する基準は何かという点になると、まだ不明確な点が多い。従来の研究では、それをヒューマニズム(人間主体主義)の立場に立ってア・プリオリに主張するか²⁾、何らかの特権的視座を設定してそれを主張するものが多かった³⁾。だがそれぞれの視座の設定が先験的に行なわれるかぎり、彼等の主張もわれわれを十分に納得させてくれない。

このような研究の現状において、初期ルカーチの物象化論から甚大な影響を受けた精神病理学者ガベルの問題提起は新鮮である。

【1】 ガベルの問題提起

彼は、虚偽意識と精神分裂症の間に構造的類

似性があると主張し、両者に共通する特性を「病的合理主義」と規定した。これは、虚偽意識の判定基準を観察可能な精神分裂症との構造的類似性に求めるという斬新な問題提起である。

この判定にいたる彼の論理の大筋は以下の通りである。

(1)彼は虚偽意識の判定基準を「具体的全体性」(ルカーチ：[6])におく。これは弁証法的側面、時間-空間(時-空)的側面、価値論的側面が統合されている1つのコスモスである。具体的全体の弁証法的側面とは、人間と世界間の弁証法的(対立関係を含んだ)相互作用が存在することであり、その時-空的側面とは、空間化(以下で述べるように、これが物象化のキイ・カテゴリーである)と時間化(これは具体性を確立する要因である)との間に一定の均衡が存在することであり、その価値論的側面とは、具体的全体に肯定的価値評価を与えて、それを構造化(安定化)することである。ここで言う「価値論」は経済学で用いられるそれとは定義が異なる点に留意されたい。この具体的全体は物象化された世界である(物象化されない世界は存在しない)が、これらの三つが同時に満たされている物象化の状態が、ガベルによれば、「正常な状態」である。

(2)この構造化された具体的全体が崩壊した時、社会的政治的にも人間の精神活動にも病的現象が発生する。精神病の臨床例を総合してそれらの特徴を彼なりに整理したのが第1表([3] p. 123)である。ここでは彼は精神病を「超実在主義的障害」と「亜実在主義的障害」の二つに分類しており、われわれが問題にする病的合理主義は物象化の過剰とならんで、後者に属している。

第1表 ガベルの図式

超実在主義的障害	正常な状態	歪実在主義的障害
同一視の欠如 象徴化不能 可能観念の喪失 病的実在主義	正常な同一視	強迫的同一視 同一性の象徴化 可能観念の強勢 病的合理主義
過度に構造化された現実把握 世界把握における時間的側面の優越 「今-ここに」体験の優越(カッシーラー)		構造化の不十分な現実把握 世界把握における空間的側面の優越 「今-ここにいる-自分」という機能の喪失(ミンコフスキー)
所有カテゴリーに対する存在カテゴリーの優越 客観化能力の喪失 「自己」と「内的態度」の分離不能 病的真正性(嘘をつけない患者) 物象化不足		存在カテゴリーに対する所有カテゴリーの優越 病的客観化 「自己」と「内的態度」の根源的分離 個人的虚偽意識 物象化過剰

(3)病的合理主義の成立メカニズムの中で軸的役割をはたすのは時間である。時間次元は事象の連続(持続)、不可逆性および非対象性を特色とする。そして、具体的全体は時-空構造の四次元連続体であるから、空間が時間的序列で配置される時に、それはその全体性を確保する。時間化は思考の総合化に作用する。

この時-空構造が何らかの理由で破壊されて、時間化の衰退・空間化の優位(以下簡単化のためにこれを時間の空間化と呼ぶ)が生ずると物象化の過剰=病的合理主義と規定できる虚偽意識が出現する。ガベルによれば「この空間的要因の優越こそが、虚偽意識の脱現実的(分裂病的)性格を生む真の基本障害」([3] p. 290)である。ここにおいては、時間(持続)が空間化され、「その中では、『前』や『後』といった観念は絶対的な意味を持たず、その結果、過去に戻ったり『ゼロ時』からやり直したり、事後的に組み直したりすることが正当化される。このような連続体は機能的には空間に等しい」(p. 108)。これが「病的合理主義」の土台となる。

(4)時間が衰退した世界=過剰に空間化された世界では、精神病の分野では「今-ここにいる-自分」の認定が出来なくなり、時-空を超えた同一視が生ずる。また社会的病理現象としては歴

史的経緯を無視した「同一視」(ナチズムに反対する者はユダヤ人である)が病的合理性を伴って成立してくる。これら両者の間に構造的類似性があり、それらを総合できる虚偽意識理論の体系化を試みたのがガベルである。

この問題提起は重要である。ここには従来の虚偽意識論のジレンマを止揚する立脚点があると思われるからである。本稿はガベルの問題提起にそって『資本論』における虚偽意識論を時-空構造論の視点だけから検討しようとするものである⁴⁾。

ただし、ガベルと本稿の間には決定的な視角の相違がある。第一に、ガベルは物象化の過剰(あるいは過小)を問題とするが、「日常生活の宗教」である経済的虚偽意識は彼が「正常な状態」と見なした世界で成立するものである。本稿の課題は、ガベルとは逆に、彼が「正常な状態」とした世界において彼の言う「病的合理主義」が語り得るか否かを明確にすることである。第二に、本稿でわれわれが目ざすのは『資本論』の虚偽意識論を時-空構造の視角から検討することであるが、これは資本主義を概念的に把握する時に要請される「内的時間意識」(フッサール)における時-空構造であって、これは経済学が学として成立するための認識論というべきものである。これに対してガベルが社会的虚偽意識の噴出の例としてあげているのは、人種差別と全体主義、具体的にはナチズムとスターリン主義であり、彼が最大の関心をよせるのは、「理論的マルクス主義は本質的に虚偽意識批判であるが、政治的マルクス主義はそれ自体虚偽意識なのだ」([3] p. 6)という文章が示すように、スターリン主義の批判である。こういう異常な社会的虚偽意識の批判的考察に関心をよせるガベルは、ルカーチに大きく依拠しながらも、ルカーチが虚偽意識を経済の分野に限定して論じている点には批判的である⁵⁾。本稿は、ガベルが「正常な状態」に含めて考察の対象外とした経済の領域において彼のいう「病的合理主義」が語り得ることを主張しようとするもので、ここにガベルの問題設定と本稿のそれとの決定的な相違がある。

【2】 経済空間の特殊性

資本主義の「経済的運動法則の解明」を目的とするマルクスの『資本論』が分析の対象とするのは全面的商品交換の世界である。この世界は、私的所有に基づく社会的分業が確立されていること、生産はすべて他人のための使用価値生産としておこなわれる(自給自足経済の完全否定)こと、その生産に必要なものはすべて商品として市場で入手できる(「商品による商品の生産」)こと、労働力は商品化されていること、それゆえ資本対賃労働関係が生産関係の基本であることを含意している。この全面的商品交換の世界を基本的に特徴づけるのは数量化であり、数量化は貨幣(価値尺度としての貨幣)によって達成される。つまり、全面的商品交換の世界に登場するものはすべて価格を持つ。そして、価格(貨幣との交換可能性)によってだけ差異化され、価格を実現する(貨幣所得を入手する)仕方によって階級の差が決定される⁶⁾。経済空間は、貨幣によって統合(数量化)された一種の純粋平面空間である。このなかで価格という数値だけを追求する主体が「経済人」である。それゆえに「経済人」は決して全人格の主体ではない。全人格の主体の一部、価格という数値だけを行動基準とする人間主体にすぎない。経済学はこのような人間主体の活動を研究対象とする学問であるから、対象とする経済空間自体がすでに人格の全体性の崩壊、「病的合理主義」の基盤に立脚しているといえる。ガベルがいう「空間要因の優越こそが虚偽意識の脱現実的(分裂症的)性格を生む真の基本障害なのだ」([3] p. 290)という判定は、経済空間についてはその本性上妥当するからである。

ところで、全面的商品交換の世界、数量化によって統一される平面空間の世界に登場した途端に、商品が如何に生産されたか、労働者がどのような環境下で生活しているかということは全部背景に押しやられてしまい、市場でどのように評価されるかだけが問われる。これは商品経済の持つ際立った特色である。それゆえに、全面的商品交換の世界をそのまま記述する経済

学は当然成立しうる。だが、経済空間の表層的断面の記述だけでは資本主義の理解は十分に出来ない。ここに問題の難しさがあり、それをマルクスがどのように処理したかをみるのが以下の課題である。

【3】 抽象過程における具体的時間の消去

全面的商品交換の世界は、生産の無政府性と原子的競争を反映して絶間なく変動する偶然の世界である。この偶然の世界の中に資本制経済を1社会構成体として存立せしめる法則が存在しなければ、資本主義はそもそも存続できない。この法則を、アダム・スミスは「見えざる手」とよび、マルクスは価値法則と総称した。この法則を概念化し、資本主義の存立構造を明らかにするのが理論経済学(経済学原理論)の課題である。このためには何よりもまず資本制経済の構造を認識(記述)できるカテゴリーを確立しなければならない。経験的事実と理論的カテゴリーの間には断絶があり、現在において全体の認識を可能にする『本質的切断』つまり「現在を切断して、その切断によって明らかにされる全体のすべての要素を、それぞれの内的本質を直接表現する、直接的な関係におく切断」(アルチュセール[1] p. 143)が必要だからである。資本主義の表層からこの理論的カテゴリーを確立する過程が、マルクスによって「下降の旅」と呼ばれた抽象操作である。これは、「生きた全体」から偶然的・非本質的なものを捨象して本質的なカテゴリーに到達する「研究の過程」とされている(Kap. I. p. 22)が、この抽象は如何にして行なわれるのであるかについて、マルクスは詳しい説明は行っていないが、以下に引用する個所は流通部面についてマルクスが抽象化の方法を語ったもので、注目に値する。

現実にはこの部面(資本の流通部面=全面的商品交換の世界)は、各個の場合についてみれば、偶然によって支配されている競争の部面である。したがってそこでは、これらの偶然を通して貫徹され、またこれらの偶然を調節する内的法則は、ただこれらの偶然が大量

に総括される場合にのみ、目に見えるようになる。(Kap. III. p. 1061)

これは抽象化の基本的なパターンであるが、この思考様式それ自体は古典派経済学が中心価格あるいは自然価格を抽象したそれと異なるところはない。だが、この抽象を可能にする現実的メカニズムを何に求めるかでは大きな相違がある。古典派経済学はこのメカニズムを資本の自由移動に基づく価格の自動調節機構に求めた。古典派経済学においては、価格(市場価格)はまだ中心価格を中軸として変動する運動として認識されていたが、新古典派経済学では価格運動自体が中心価格(均衡価格)に収斂するとされ、運動体としての価格までが消去されていることは周知のところであろう。マルクスは、古典派経済学の中心価格を理想的平均価格と把握し、その成立メカニズムを産業循環の全局面であるとした。この点がマルクスの経済学と古典派・新古典派経済学とを区別する決定的な点である⁷⁾。

だがいずれにしても、現実から理論的カテゴリーを抽象する方式は共通しているものであり、ともに規則的に繰返される(基本的には円運動をする)現象からその軸点を検出することである。重要なことは、その思考操作の過程で具体的時間は消去されるということであり、一定のカレンダー時間間に出現する事象を1点に集約すること(具体的時間の消去)によって構造を記述する理論的カテゴリーは成立するということである。これは、先に引用したガベルの表現を用いれば、「機能的には空間化に等しい」。理論経済学はこの位相において成立するのであるから、それは本来的に虚偽意識の理論化にならざるをえない要因を最初から含んでいるといつてよい。

具体的時間⁸⁾の消去の第一の帰結は、「原因と結果の転倒」(Th. p. 469)、未来の現在あるいは過去への同時化である。これは、規則的に反復する(再生産される)経済現象を概念的に把握する場合に避けることのできない思考様式である。マルクスは次のように言っている。

社会的生産過程の前提はすべて同時にこの過程の結果であり、そしてこの過程の結果はすべて同時に前提として現われる。それゆえ、この過程がそのなかで行なわれている生産諸関係は、すべてこの過程の所産であるとともに、この過程の条件でもある。この最後の形態では……われわれが過程の姿を過程の現象の中で考察すればするほど……過程はますます強固になり、したがって、この諸条件は過程から独立して、過程を規定するものとして現われ、そして、過程のなかで競争する人々自身の関係は彼らにとって物的な諸力として、諸物の諸規定として現われる。(Th. p. 487-8)

具体的時間の消去の第二の帰結はカテゴリーの永遠化である。マルクスは『資本論』第1巻第21章「単純再生産」において、「可変資本は、われわれが資本制的生産過程をその更新の絶えざる流れにおいて考察するや否や、資本自身の元本から前払いされた価値としての意義を喪失する」として、次のように述べている。

はじめには出発点であったものが、過程の単なる継続……単純再生産……に媒介されて、資本制的生産の独自の成果として絶えず生産され永遠化される。……労働者のたえざる再生産または永遠化は、資本制的生産の不可欠の条件である。(Kap. I. p. 743)

具体的時間の消去の第三の帰結として論理時間の登場が上げられる。これは「価値通りの交換」を前提とした『資本論』のすべての議論は論理的時間の中で展開されているといえるのであるが、ここでは資本循環論と再生産表式分析について、それを見よう。両者とも期間分析を枠組みとした議論である。その枠組みの中では時間要因が基本的な役割りを演ずる。だが、資本循環論においては始点と終点の間で資本が如何にメタモルホーゼを行なうかが中心論点であって、そこにあるのは極めて抽象的な論理時間でしかない。また再生産表式分析では、単純再

生産は無時間の経済空間として展開されているし、拡大再生産においても時間の経過は機械的である。定常成長論においては論理的時間しかないのと同様に、マルクスの拡大再生産においても論理的時間しか存在していない。

具体的時間の消去の第四の帰結として、機械的時間の導入を上げることができる。これは、規則的に繰返される経済事象(例えば円運動を行なう価格)を中心価格(構造連関の軸点)を設定する平均化機構として把握せずに、円運動自体を構造の特色として固定化するもので、マルクスにはない、*circuler flow*を経済の構造的存在様式と見る立場はこの代表である。この立場は一応時間を導入しているが、その時間はカレンダー時間でもなければ、歴史的時間でもなく、機械的な論理時間ではない。宇野弘蔵が経済学理論の体系は永遠に繰返される円環運動として展開されるべきだとしたのも基本的にはこれと同じである⁹⁾。

以上が経済的カテゴリーを確立する抽象過程で具体的時間が消去されることの帰結の内重要なものである。これらすべてが、ガベル流に言えば、虚偽意識成立の心要条件である。理論経済学は思考操作によってこの虚偽意識成立の必要条件を満たす世界を構築しないかぎり成立しない以上、理論経済学には虚偽意識批判は不可能であるように見える。

[4] 経済空間の重層把握

具体的時間の消去は、資本主義の構造分析を目的とする理論経済学(経済学理論)にとって不可避な抽象操作である。これはすべての理論経済学に共通する。マルクスの経済学もその例外ではないことはすでに見た通りである。そうだとすれば、マルクスの経済学を他の経済学と区別するものは何か、特に後者を転倒した虚偽意識と規定できるのはどういう根拠に基づくかが当然疑問とされるであろう。これに答えるのが、マルクスの独自の重層の経済空間把握である。

すでに述べたように、全面的商品交換の世界は資本主義の表層的断面であるが、そこには資本主義のすべてが投影されている。それゆえに、

この次元で資本主義を記述することは可能である。後ほど説明するが、マルクスは俗流経済学のルーツをこの点に見ている。「ブルジョア経済学体系の批判的叙述」をめざすマルクスは、全面的商品交換の世界に留まることはできない。ここに投影されている資本制経済の全構造を発掘するのがマルクスの仕事である。ここから経済空間の重層の把握の必要性がでてくるのであるが、マルクスはそれを全面的商品交換の世界を「単純な流通」と規定することから始める。そして、この「単純な流通」について『経済学批判』の原初草稿において次のように言う。

単純流通は、ブルジョアの総生産過程の抽象的な一局面であり。この局面は……その背後に横たわり、その結果として出てくると同時にこの局面を生みだしつつあるより深い過程の、つまり、産業資本の一契機として、それのたんなる現象形態として実証される。(Gr. p. 1027)

この文章の要点は、全面的商品交換の世界(総流通)と総生産過程のマクロ・レベル間に現象と本質の弁証法的関係を設定したことにより、バックハウスらによって表層と深部の「二層モデル」と名づけられた。これは、所有法則転回論の理論にとっても、また歴史・理論説批判にとっても重要なものであるが¹⁰⁾、マルクスの経済空間理解の特長を理解する上で決定的に重要なものである。これこそが、経済空間の重層の把握の出発点である。そして、資本制経済の表層を「物象的依存関係」、その深部を人と人の生産における社会的関係(生産関係)とするのがマルクスの基本的な考え方である。

ところで、資本制経済の表層と深部を結ぶのが「物の人格化と生産諸関係の物化」(Kap. III. p. 1063)という概念である。

物の人格化は、マルクスの経済空間に登場する三つの経済主体(資本家、労働者、地主)の性格を規定したもので、そこでは資本家は資本の人格化したものとして、労働者は商品としての労働力の担い手として、地主は私的土地所有の

経済的規定性においてだけ登場する。これらがマルクスの経済空間に登場する「経済人」の特性である。

生産諸関係の物化はマルクス物象化論のキイ・カテゴリーである。これを理解するためには、マルクスの生産関係には2つの側面があることを認識することが重要である。個々の資本の生産現場における人と人の社会的関係(資本・賃労働関係)と個々の資本がその一翼を担う社会的分業関係の二つである。この両者が結合されることによって資本制経済の生産の総体が形成されるのであるが、資本制経済ではこの両者は、全面的商品交換のネットワークを通してだけ結合される。ここにおいて生産関係は物化される。すなわち、資本・賃労働関係は商品に物化され、社会的分業関係は貨幣に物化される。各資本が社会的分業の一翼を正しく分担したかどうかは、その生産物が商品として実現する(貨幣に転化する)ことによってだけ実証される。マルクスが貨幣を「明確に生産関係そのものを物に転化する」(Kap. p. 1059)経済カテゴリーと規定した理由はここにある。労働力の商品化と私的土地所有の物化についてはここでは説明を省略したが、これらを含めて資本制経済は「物象的依存関係」の経済と規定できるのである。生産関係の物化という視座は、二層からなる経済空間を「物象的依存関係」の平面空間に環元することに他ならない。これだけならば、後に見る「俗流経済学」と基本的には異ならないといえる。だがマルクスはここにとどまらない。

これを前提としてマルクスはさらに物化されたカテゴリーの独立化(骨化)という議論を展開し、経済空間をさらに重層化するのである。物化された経済カテゴリーの独立化・骨化を説明する上で決定的な役割りを果たすのは、具体的時間の消去である。つまり、物化された経済カテゴリーは繰返される(再生産される)ことによって独立化・骨化する。これをマルクスは「発生的叙述」とよんで、「種々な段階における[骨化された経済カテゴリーの]現実の形成過程を理解すること」(Th. p. 477)としている。このプ

第2表 『資本論』の論理構造

論理次元	付加価値の分割			
価値	総投下労働=純生産物の価値			
剰余価値	可変資本	剰余価値		
生産価格	賃金	平均利潤		
「三位一体」 範式	賃金	監督賃金	利子	地代
	(労働)		(資本)(土地)	

ロセスを詳論することはここではできないが、付加価値の分割についてだけその概略を示したのが第2表である。労働価値論の基本は、資本制経済の諸階級の所得の源泉(純生産物の価値)を投下労働で評価するところにある。通常考えられているように、それは交換比率の決定理論ではない。純生産物の価値から労働力商品の価値を控除したもとして剰余価値が定義される。これは「目に見えない」経済の実体である。資本制経済の長期均衡価格である生産価格は各生産部門間で均等な利潤率を保障する価格であって、平均利潤の背後に剰余価値があるとするのがマルクスの主張である。ここにやっかいな「転化問題」が存在することは周知のところであろう。利潤はさらに分化・独立化するのであるが、重要なのは利子と地代の独立化である。地代は利潤からの優先的控除項目として独立化する。利子は利子生み資本の収益として成立してくるが、これが産業資本の性格を一変させ、機能資本の所得は監督賃金と見なされ、残余は利子と見なされる。かくして「日常生活の宗教」である経済的「三位一体」範式の完成形態(労働-賃金、資本-利子、土地-地代)が成立する。ここではすべてのカテゴリーが費用化され、価値構成説が成立する。このように、マルクスは経済空間を重層的に把握し、その各レベルで経済カテゴリーは固有の性格を獲得することの一つ一つ「上降的」に明らかにし、最後は経済的「三位一体」範式にいたる。『資本論』の叙述展開の特色はここにある。

このような叙述展開が必要な所以は、全生産関係が物化することによって見えなくなる搾取

関係を発掘するためである。これを分配論的に言えば、価値論で三大階級(労働者、資本家、地主)の所得の源泉である純生産物の評価額を規定し(これを労働で行なったのはマルクスの経済本質観による)、次いで全搾取階級の所得の源泉である剰余価値を定義し、最後に剰余価値の分配諸形態とその独立化を明確にする。そして、すべての分配諸形態が再生産過程で費用化されることによって経済的「三位一体」範式という搾取隠蔽の経済観念が成立することを述べ、これを批判する。これが『資本論』全三部の構成の大筋である。

【5】「俗流経済学」批判

以上の理解を基礎にしてマルクスの「俗流経済学」批判が出てくる。マルクスは、アダム・スミスの中に資本制経済の生理を分析した部分と現象に囚われその記述に専念した部分が混在しているとした(Th. p. 233)が、「俗流経済学」とはこの後者だけが自立したもので、マルクスは、

俗流経済学は、ブルジョア的生産関係に囚われている生産当事者の諸観念を、教義的に通訳し、体系化し、弁護すること以外には、実際何もしていない。(Kap. III. p. 1047)

とした上で、「彼らの観念や動機には資本制的生産の表面的な外観が反射しているだけである」(Th. p. 404)とか、そこにおいては「いっさいの媒介は切断されている」(Th. p. 457)とか、資本制的生産関係の基本である剰余価値との「内的な関連が見失しなわれる」(Kap. III. p. 1061)と特徴づけ、これらの議論を「倒錯、すなわち、諸物において現れる一定の社会的生産関係をこれらの物自身の物的な自然属性と考える倒錯」(Re. p. 43-44)と断罪している。これをわれわれの言葉で言い換えれば、マルクスは重層的構造を持つものとして把握しなければならない経済空間を全面的商品交換次元の平面空間に還元してしまった点に「俗流経済学」の特色があるとしていることに他ならない。これらはす

べて商品交換の平面次元で独立化・骨化した経済カテゴリーをそのまま(無批判的に)用いて資本主義を理解しようとしたもので、ガベルの用法でいえば、「過剰物象化」の産物である。そして、「過剰物象化」が「病的合理主義」を生む。

以上がマルクスの「俗流経済学」批判の基本であるが、彼の「俗流経済学」批判はそれにつきない。彼はその必然的成立根拠をも問題とする。この点を経済的「三位一体」範式の基礎となる価値構成説¹¹⁾について見よう。マルクスは、商品価値が賃金・利潤・地代に分解されるのではなく、逆に商品価値のほうがそれら三者から構成されるという理論(外観)は「心然的に生ずる」として、その理由を次のように説明する。

なぜならば、諸個別資本とそれらの商品生産物との現実の運動においては、諸商品価値が分割されるべき前提として現れるのではなく、逆に、価値が分割されて生ずる諸構成部分が、商品の価値に前提されたものとして機能するからである。……労働賃金は、それに対応する価値等価が生産される前に、契約によって定められる。それゆえ、商品および商品価値が生産される前に、その大きさが与えられている一価格要素として、費用価格の構成部分として、労働賃金は、独立の形態で商品の総価値から分離される一部分としては現れず、逆に、この総価値を前もって規定する与えられた大きさとして、すなわち価格または価値の形成者として現れるのである。労働賃金が商品の費用価格において演ずるのと同様な役割りを、平均利潤は商品の生産価格において演ずる。……平均利潤の一部は利子の形態で、諸商品とその価値の生産に前提された一要素として、独立に機能資本に相対する。……地代もこれと同様である。……商品価値の分解が作りだしたこれらのものが、なぜつねに価値形成そのものの諸前提として現れるのかという秘密は、簡単に言えば、資本制的生産様式は、[……]その経済的規定性を再生産するということである。それゆえに、その前提が結果として現れるのと同様に、その結果がつ

ねにそれに前提されたものとして現れるのである。……価値の諸[分解]部分が取る特定の態様が前提されるのは、それがたえず再生産されるからであり、そしてそれがたえず再生産されるのは、それがたえず前提されているからである。(Kap. III. p. 1112-4)

ここに否定すべき命題である構成価値論に対するマルクスの姿勢が現れている。この姿勢は、物化された経済カテゴリーの独立化・骨化を追求する彼の方向性と完全に整合的である。マルクスは構成価値論が必然的に成立する現実的基礎に正しく着眼している。これを時-空構造論的に言えば、本来重層構造として把握すべき経済空間を具体的時間消去のメカニズムに依拠して資本制経済の表層に一元的に平面化する時に構成価値論的理論構成が成立つということに他ならない。そして、平面化された経済空間では生産関係が消えてしまい、そこにおいて成立する経済カテゴリーが生産関係の物化したものであるという事実そのものが見えなくなる。ここに資本主義の本質理解をさまたげる重大な「認識論的障害」がある。新古典派経済学で企業は資本主義を組織する組織体としてではなく、需要に受動的に反応するだけの「点」でしかないとされるのは、そのよい例といえよう。この種の「認識論的障害」の批判、これがマルクスの経済的「三位一体」範式論の眼目である。

マルクスが物化された世界で成立する観念を当然視する意識を虚偽意識とするのは、簡単にいえば、それらが資本主義を1社会構成体として存続せしむる上で基本となっている搾取(この経済的表現である剰余価値)を隠蔽するからだということであるが、これだけならばまだイデオロギー的弾劾に留まる。むしろマルクスの独自性は、剰余価値隠蔽機構の基礎を生産関係の物化として把握し、物化形態の独立化・骨化を体系的に展開したところにある。マルクスの経済的「三位一体」範式批判は、カントのそれと同様に、その基礎づけでもあったのである。

【6】暫定的結語

われわれは今までガベルの虚偽意識論(なかくんずく時-空構造論)を手掛かりにして、マルクスの経済的虚偽意識論を検討してきた。そこからなんらかの結論を引出すとすれば、「病的合理主義」はマルクスの世界についても語り得るが、虚偽意識の判定基準は異なるということである。この点を確認して本稿の暫定的結語としたい。

まず最初の論点については以下の諸点を確認される。

(1)ガベルが立論の起点とした「具体的全体性」は、経済学の対象が物象化された世界であることによって解体している。彼によれば、それが「病的合理主義」の発生基盤であった。「経済人」という部分人間の活動の総体を分析対象とする学問である経済学は、虚偽意識の発生基盤を研究対象とし、虚偽意識の理論的体系化を始めから宿命づけられているといえる。

(2)経済学が資本主義の構造を分析するに過ぎず、具体的時間の消去は不可欠な抽象操作である。これはすべての経済学に共通する。マルクスの経済学もその例外ではない。

(3)マルクスの経済学とそれを分けるのは、前者が経済空間を重層的構造として把握するのに対して、後者は経済空間を資本主義の表層に平面化している点にある。後者を経済的虚偽意識と断定するマルクスの方法論的根拠は彼の空間論にある。だが、すべての経済学はそれぞれ独自の経済空間(時間の空間化された平面)で構築される点では共通しているのである。

以上のすべてがガベルが「過剰物象化」あるいは「病的合理主義」と呼んだ異常現象に共通するといつてよい。だが社会的あるいは経済的虚偽意識の判定基準を、分裂症との構造的類似性に求めたガベルと空間把握に求めたマルクスとは大きな相違がある。マルクスは完全に物象化されている資本主義の構造意識の理論化を深層心理学的次元で取り上げたのに対して、ガベルは虚偽意識を異常な社会現象として社会学の次元で取り上げている¹²⁾点にその相違の根源

があるといえる。にもかかわらず、ガベルの作業仮説はマルクスの物象化論の性格を理解する上では有効であり、彼の理論を援用することによって、資本主義の「経済人」の日常意識そのものが「病的合理主義」であり、それをそのまま肯定的に概念化した経済学は必然的に経済的「三位一体」範式(経済的虚偽意識の概念化)にいたるといえるのが、本稿の暫定的結論である。

(一橋大学経済研究所)

注

- 1) Kap. III. p. 1059 以下の文章を参照。
- 2) 例えば、Helmich[4]は、「社会的存在としての人間は意志と意識を持って連带的に相互に関係し、歴史を創らなければならない」というマルクスの真実性の立場(Folie)から、資本の諸法則によって規定される現実を転倒された世界とする(p. 226)とし、マルクスの宗教批判と物神性批判の間に「構造的類似性」(p. 242)があるとすると。
- 3) ルカーチでは物象化の意識を克服できるのは「プロレタリアートの立場」[6]であり、広松グループでは天才マルクスの「学知的第三者」だけが虚偽意識=経済的「錯認」を認識できるとされている[5]。
- 4) 言うまでもなく、本稿のテーマで論ずべき点は他にも多い。『資本論』における歴史(通時)と論理(共時)の関係などがそれである。これらについては他の機会に考察したい。
- 5) ガベル([3] p. 120)を見よ。
- 6) デュルプラス[2]参照。
- 7) 高須賀義博[8]『マルクスの競争・恐慌観』岩波書店参照。
- 8) この概念は、修正不能な過去と予測不能な未来の接点として現在を見る「歴史的時間」に近い。だがマルクスの歴史の概念はこれよりもさらに広い内容を持っているので、それとの混同を避けるために、この概念が使用される。
- 9) 宇野弘蔵[11]『経済学方法論』『宇野弘蔵著作集』岩波書店参照。
- 10) この点を力説したのは佐藤金三郎であった。氏はこれを「論理説」対「論理・歴史説」の枠組みのなかで、『要項』=「論理説」の基本命題と見なし、『資本論』では「論理・歴史説」に変化したと主張した[10]。氏の立場からすれば、『資本論』では「二層モデル」は放棄されたということになるが、筆者はこの見解は支持していない。時・空構造論に限定していえば、『要領』から『資本論』への発展は、「二層モデル」から「多層モデル」へである。

11) 価値構成説について詳しくは、高須賀義博[8]:「経済的「三位一体」範式の解剖」を見よ。

12) この点はガベルが「病的合理主義」を異常現象(「過剰物象化」)においてだけみ、正常な「経済人」における「病的合理主義」にはまったく関心を示していないことと関連がある。ガベルの図式(第1表)で「正常の状態」の欄には「正常な同一視」だけがあがっていて、その他はすべて空欄になっているのはその現れである。筆者は彼が言う「正常な状態」は「過剰物象化」と「過小物象化」がバランスを取って共存している状態と規定すべきであると考えている。

引用文献

マルクスからの引用は以下にあげる記号で表し、他は番号で示す。()内の数字は初出年を示す。引用ページはここにあげた本のものである。

[Gr.]『経済学批判要綱』高木幸一郎監訳、大月書店、1958年。

[Th.]「収入とその諸源泉」『資本論草稿、経済学批判(1861-63年草稿)』IV、1982年。

[Re.]『直接的生産過程の諸結果』岡崎次郎訳、大月書店、1970年。

[Kap.]『資本論』、『マルクス・エンゲルス全集』I.(第23巻)、II.(第24巻)、III.(第25巻)、大月書店。

[1] アルチュセール、L. (1968)『資本論を読む』権寧・神戸仁彦訳、合同出版、1974年。

[2] デュルプラス(1979)『「政治経済学」とマルクス主義』岩波書店、1988年。

[3] ガベル、J. (1968)『虚偽意識』木村洋二訳、人文書院、1980年。

[4] Helmich, Hans-Jachim (1976) "Verkehrte Welt" als Grudgedanke des Marxschen Werkes.

[5] 広松涉他『『資本論』を物象化論を視軸にして読む』岩波書店、1986年。

[6] ルカーチ、G. (1923)『歴史と階級意識』城塚登・古田光訳、白水社、1985年。

[7] 清水和巳「イデオロギーと分裂病——資本主義の合理性批判のために——」『早稲田経済学研究』第31号、1990年。

[8] 高須賀義博『マルクスの競争・恐慌観』岩波書店、1985年。

[9] 高須賀義博「経済的「三位一体」範式の解剖」『経済研究』第38巻、第1号、1987年。

[10] 高須賀義博編『『資本論』成立史……佐藤金三郎氏を囲んで』新評論、1989年。

[11] 宇野弘蔵(1962)『経済学方法論』、『宇野弘蔵著作集』第9巻、岩波書店、1972年。